



TITLE:

<批評・紹介>大金弔伐録

AUTHOR(S):

外山, 軍治

CITATION:

外山, 軍治. <批評・紹介>大金弔伐録. 東洋史研究 1936, 2(2): 164-167

ISSUE DATE:

1936-12-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/145578>

RIGHT:

通じて滿文老檔を解讀し得る點に存する。滿文老檔は内藤先生により清初史研究の第一の史料と折紙づけられたものであるが、先生の手により我が邦に將來されて以來三十年、未だにその史料の性質の鮮明は不問にされたまま殘されてある。然し乍らその難解の故に放置する事は許されない。滿洲實錄の滿文は滿文老檔を基礎にして纂修された事は周知の事實であり、又この事から同實錄より老檔に入り得ると云ふ可能性が存する所以である。

歴史に於いては先づ正確な知識に基いて物語る事が何よりも要求されるが、例へば史料批判と云ふ如き「地下の作業」は何と酬はれる事の少い仕事であらうか。而してこの作業を怠つた所の如何にも不安な危かしい建築物が何と多く輩出して居る事か。かゝる折同書の刊行の重要性は強調されなければならぬ。

今西學士の滿洲實錄の翻譯は色々の點より見て清初史學界を一步前進せしめたものと言ひ得よう。

本書は譯稿であり、同學士はその學的良好心から早くもその定譯の完成に精進されて居る。その成る日の一日も速かなるを祈る。尙本誌彙報を参照せられたし。

(三田村泰助)

大金弔伐錄

大金弔伐錄には從來、

(1) 墨海金壺所收本 上下二卷

(2) 守山閣叢書所收本 四卷

の二種の刊本があつたが、昨今この書の印行相繼いで行はれ、昨年には、

(3) 四部叢刊三編史部所收『弔伐錄』上下二卷

が刊行せられ、更に今年に入つては、

(4) 中國内亂外禍歴史叢書第三冊所收『大金弔伐錄』四

卷

(5) 國學文庫第三十六編『大金弔伐錄』四卷

の發刊を見、こゝのところ弔伐錄の當り年の觀を呈してゐる。しかし近刊(3)(4)(5)三種の内、(4)(5)は共に(2)守山閣本の重印に過ぎないから、從來行はれてゐた(1)金壺本(2)守山閣本に近刊(3)四部叢刊本を加へて弔伐錄は三種の刊本を有つことゝなつたわけである。(1)は張海鵬が超然堂吳氏(常熟の吳長か)所藏抄本に據つて墨海金壺に入れたもので上下二卷本、(2)は錢熙祚が四庫全書原本(文瀾閣本)をもとゝし、之を(1)の吳氏本と校合して守山閣叢書

に收めたもので四卷本である。四庫提要には、この四庫本は永樂大典より録出したもので大典本はもと巻数がなかつたが今詳かに釐訂を加へて析ちて四卷となしたといつてゐる。(3)は錢遵王述古堂抄本を影印したもので(1)と同じく上下二卷になつてゐる。(1)(3)は二卷に、(2)は四卷になつてゐるが、後述する如く編目の序列その他に出入異同はあるが、その内容は同一のものである。

この書の内容は四庫提要にも要記するが如く、卷首に天輔六年以前に於ける金宋交渉の梗概を記し、續いて天輔七年燕雲を交割し、天會三年四月再び宋を伐ち、五年宋を廢して楚を立てしことに關するあらゆる國書、誓詔冊表、文狀、指揮、牒檄の類を、皆年月に排比し、具さに原文を録し、康王(宋高宗)の南渡に至つて止め、それに宋徽宗、欽宗、遼天祚帝を昏德公、重昏侯、海濱王に降封せる詔書、及び右三者より上る所の各表を附し、劉豫の建國の始末に至つて終つてゐる。

以上を通觀するに、卷頭に掲げた「興宋主書」の一條は、提要にもいふ如く、天輔六年以前の舊牘が存しないから、海上の盟以後の金宋交渉を一括して記したものであるが、これは金史のもととなつた實錄にでも據つたも

のか、文中の年次は金史とは大體に於て一致するが、然し徐夢莘三朝北盟會編所引の宋側の史料とはどうもあはない。この頃に於ける金史の年次はそのまゝに信用できぬ節があるので、この條の年次も直ちに之を信憑すべきものではなく、宋側史料と比較勘考しなければならぬ。この一條を除く他の諸條、殊に靖康の難や金が河南の地に冊立した張邦昌の楚國に關する文書、誓詔冊表の類はユニークなものとして甚だ重要視さるべきものである。もつともこの中の或るものは北盟會編にも載せられてゐるが(その箇處は歴史語言研究所集刊第六本第二分所載陳樂素『三朝北盟會編考(上)』文書索引の條に記されてゐる)、提要にも指摘する如く、徐夢莘は意思諱に存して未だ刊削する所を免れず、獨り此書が全く舊聞に據つて損益を加へてゐないのに如かないのである。實にこれは金初に於ける金宋の交渉を考究する者の看過すべからざる好箇の文字である。しかしこの書の撰者は不明であり、編纂の時期も甚だ詳らかでない。たゞ卷下(卷四)の「降封昏德公詔」なる篇題の下に「太宗皇帝實錄内より錄到」とあり、太宗皇帝實錄は、金史卷六本紀によれば大定七年(宋乾道三年。一一六七年)八月に完成止進

せられたものであるから、この書がそれ以後の編纂であることが推せられる位である。前述の如く北盟會編は弔伐録所收の文書を載せてゐるから、これがこの書纂定の時期を知る手がかりになりはしまいかとも考へられるが、しかし北盟會編は之を弔伐録より引用したとはしてゐないのである。實はこの書より引用しながら、大金弔伐録なる書名を忌んでこの書に據つたといふを避けたのかも知れぬ。さすれば此書の編纂は北盟會編完成の慶元二年（金承安元年一一九六年）以前といふこととなつてその時期も略々見當がつけられる譯であるが、かういひきれぬ節もあるので、今の所は大定七年以後金人の編述に係るといふだけにとゞめなければならない。又この書が如何にして編まれたかも明らかでないが、提要が「蓋し、故府の案籍を薈萃して編次して帙を成す者なり」といつてゐるのは肯綮にあたつた推定であると思はれる。前にも述べた如く太宗皇帝實錄内より録出したといふ項目の存することもこの推定を助けるものであると考へる。此書に收められた文書の類はやがて實錄纂修の材料となつたもあり、ひいては又金史編纂の基をなしたものであらう。

以上でこの書に關する説明を終つて、次に三種の刊本を比較しよう。(1)金壺本と(2)守山閣本を比べると、編題の序列に多少の差違のあるほか、守山閣本の跋にも見える様に、上卷「正月十四日回奏宋主」中に「所承誓書」以下三百三十字を脱し、「宋主致謝書」中「別幅細色并雜物」以下が「宋少主與左副元帥報和書」（金壺本には報知としてゐる）の後に在り、「宋少主新立誓書」の篇題及び首尾がなくなり、僅かに「招納叛亡」以下四百三十九字を存し、それが「宋少主報和書」中に混れこんでゐる。又「宋少主報和書」中「兩朝和好」以下が別に一篇をなし、「又劄子」と題せられてゐる。下卷「孫傳等乞立趙氏第四狀」中「傳等無任哀痛」以下五十九字が第五狀の末に移し置かれ、而して第四狀に結文がない。又「依准製造迎接等事狀」の全篇が脱去してゐる。更に其餘字句の脱誤枚舉すべからず」といつて、隨分惡くいつてゐるが、しかしかくいふ守山閣本にも脱略錯簡は少くないので、金壺本には卷上に掲げてゐる靖康元年四月七日の「宋主回書」の本文を全く缺き、その次の「黃絹間牒結構書」の篇題を脱去し、その本文を「宋主回書」の篇題の下に掲げてゐるほか、金壺本によつて訂正して始めて意味の通ずる處

が非常に多く、殊に文中女眞の姓名官職が悉く改譯を経てゐて、字輩、勃極烈を共に貝勒に、國盧(魯)你移賚勃極烈を固倫尼伊拉齊貝勒に、徒單を圖克坦に、銀朮可を尼楚赫に、烏林答贊謀を烏凌噶思謀に、回離保を和勒博に、撻懶を達賚に、闊母を多昂摩に、撒離母を色呼美に幹離不を幹喇布に改めてゐるほかにもかうした例の多いのには甚だ不便を感じる。(3) 四部叢刊本には金壺本ほどの錯簡はなく、篇目の序列も守山閣本と同じであるが、守山閣本に缺く所の靖康元年四月七日の「宋主回書」及び「黃絹間牒結構書」の篇題をも備へてゐる。この書の跋には、「然るに靖康元年帥四月七日宋主金國元帥に回す一書は乃ち是の本の獨有する所たり」と自負してゐるが、これは金壺本にもちゃんとあるので、空威張りに過ぎぬ。四部叢刊本を金壺本に比較すると、金壺本が卷下の最初に掲げてゐる「宋主回書」なる篇目を缺き、之を上卷の最後に載せてゐるのは明らかに四部叢刊本の失當であり、卷下の天會五年宋人が趙氏を立てんことを乞うた文書の順序も金壺本に比してやゝ混雜してゐる様である。又守山閣本跋に於て指摘してゐる様に金壺本は「依准製造迎接等事狀」の全篇を缺いてゐるが、この本も同様之

を缺いてゐる。文中の女眞の官名人名は改譯せられてはゐない。影印の美麗さは相當なもので非常に読み易いであろうしたものか缺字が多く、他の本によつて補はなければならぬ。要するにこの三種の刊本は必ず比較校合して讀むべきで、輕々に一を採つて他を捨つべきものではない。この場合四部叢刊本をもととして他の二種の刊本によつて之を補ふのが最も便利である。守山閣本を重印した(4)(5)の二種の活字本の内、内亂外禍歴史叢書は句讀點を附して一應便利であるがまた隨分と誤りも多い。この二者の内では國學文庫本の方がよさうである。

なほ千頃堂書目史部には『金人弔伐錄』二卷の名が見えてゐるが、これも亦この書にほかならぬであらう。鐵琴銅劍樓藏書目錄卷九史部二編年類にも『大金弔伐錄』二卷を掲げてゐる。これは明長沙李文正公家藏抄本である。又善本書室藏書志卷八には『弔伐錄』二卷、『大金弔伐錄』二卷を別に掲げてゐる。前者は周季貺藏抄本、後者は陳氏西酌草堂藏抄本といふ。書目答問補正卷二には『大金弔伐錄四卷』金闕名 守山閣本 金壺本として、金壺本をも四卷本であるかの如くしてゐるのは誤りで、これが二卷本であることは疑ひない。

(外山軍治)